

# 越後一の寺 雲洞庵

新潟県南魚沼市雲洞六六〇 ■ 電話(〇二五)七八二一〇五二〇

## 縁起

今を去る千数百年前藤原先妣尼公がこの地にやってまいりまして、庵を結び、金城山よりわきいずる霊泉で沢山の病人を救い、金城山雲洞庵という尼僧院を建立されたのであります。以来千年来女人成仏の庵寺として、深く信仰されてまいりました。室町時代関東管領上杉憲実公、藤原末裔の因縁で禅宗の寺に開創され、日本一の庵寺、越後一の寺と云われております。赤門より参道には法華経が一字一石ずつぎざまらうめられ、古来、「雲洞庵の土踏んだか」と云われ、踏みしめてお参りしますと、罪業消滅、万福多幸の利益にあずかると云われております。

先妣尼公(雲洞庵開律宗基)

房前(藤原北家)

藤原鎌足——不比等

養老元年(西暦七二七年)藤原北家律宗の尼僧院

室町時代 関東管領上杉家曹洞宗の禅寺——現在

室町時代 永亨元年(西暦一四一九年)禅宗(曹洞宗)傑堂能勝禅師(俗名楠正成の孫楠正勝)を挿草とし越後の大禅道場として今日にいたる。

十世(北高全祝)は上杉謙信公・武田信玄公に禅を教示。

## 上杉景勝公、直江兼続公について

十三世通天存達和尚は、当地の大豪族長尾家の出身で、兄弟政景が早く亡くなり、一子景勝を引きとって雲洞庵で教育しました。その景勝公の家来お付きとして一緒に教育されましたのが、直江兼続公であります。景勝公、兼続公は戦国時代の武将としては教養高く、四書五経をはじめ中国の古典にも造詣が深く、ほとんどの戦国武将がひらかなしか書けなかつたのに物書きの専門家をおかず達筆でありました。通天和尚師北高和尚と計って武田家と上杉景勝公の婚姻を通じて、両家を織田信長公との戦いに備えようとしたのであります。時すでに遅く、武田勝頼公は滅亡し、天正十四年(西暦一五八六年)六月景勝公家老直江兼続侍大将、菟田主馬等を連れて、太閤秀吉公に謁見して従三位を受け、家老兼続公は山城守従五位を受け、景勝公養父通天存達和尚の大神に報いるため、時の正親町天皇より禅師号、佛慧普明禅師を拜受して八月下旬に帰る。直江兼続公の故郷雲洞庵の門前に禁制の制札を高く掲げ、山城守と大名格になった事を高らかに披露したのであります。その景勝公、兼続公、菟田主馬公の書状が当庵宝物殿に残されております。



■ 本堂

室町時代永亨年間、上杉憲実公によって建立されたのであるが、後江戸時代宝永四年廿四世によって再建。間口十四間、奥行十間半、新潟県出雲崎の小黒基内を棟梁とする大工群によって建てられ、近世寺院建築の最もすぐれたものとされ、新潟県の文化財に指定されている。縄文時代より続く日本海文化の建築の最終到達点のひとつにかざられています。本尊釈迦牟尼仏、脇侍、迦葉尊者、阿難尊者、十六羅漢を安置。



## 雲洞庵の土踏んだか：

往古より越後の国では、

「雲洞庵の土踏んだか」

「関興庵の味噌なめたか」

と言われ、信仰が大変盛んであった。それは、諸国の修行者が、この二大禅道場で曹洞宗と臨濟宗の禅を学ばなければ一人前の禅僧と言えぬ、ということから、修行者が互いに言い合ったものと云われている。また、赤門より本堂に至る石畳の下に法華経を一石一字ずつ刻み、その経石を敷きつめたことから、一年に一度赤門が開かれた時、お参りの善男善女が、その有難さに随喜して言い合ったのだと云われている。関興庵は、同じ南魚沼市上野に在りて、臨濟宗に属する禅寺である。

赤門  
室町時代、永亨年間に勅許を得て官寺として十萬石の赤門として建立され、後江戸時代至永四年再建され現在に至っている。昔は皇室、大名などの来訪の時、一年に一日開けるのみであった。通常は隣の黒門を通った。両脇の二王尊は江戸時代天保年間の作である。

# 境内 三千坪

金峰神社



鎌岩

(徒歩約1時間)

当庵ブナ林

藤原先妣尼公墓

御神体石  
(當庵女神)

熊野権現  
こしかけ石

経蔵



上杉憲実公墓

大桂(樹齢400年)

宇佐美定満墓

大池

土蔵

開山堂

位牌堂

長生きの水

古塚

坐禅堂

本堂

(十間)

(十四間)

庫裡

塔中

観音堂

池

池

トイレ

宝物殿

石積み堀

山道

客殿

鐘楼堂

参道(八〇メートル)

池

大杉

通用参道

板塀

受付

池

トイレ

駐車場

(350坪)

佛舍利塔

林

売店

林

墓

赤門

大杉

黒門

大杉

前門

参道路

「参道」には、一字一石  
法華経がしたためられ  
て埋められております。

「赤門」は昔、勅許を得て作られ、  
新任職入れ時、皇室関係、大名の  
来山、一年に一回の大般若会の時  
以外は開けず、通さずでありました。  
二階がないのは、赤門と云う勅許  
の朱塗り門だからです。

「黒門」は六十年に一回作  
り直すのが慣例であります。  
通常はこの門からの出入り  
でありました。